

マチュウ・コプランが構想する「マニフェスト・ペーパー・エキシビションズ」

—— 形式の革新的再物質化としての『パーフェクト・マガジン』(2003)に着目して

遠藤 萌 (実践女子大学)

2021年、フランス/イギリス人キュレーター、マチュウ・コプランは、銀座エルメスフォーラムで「エキシビション・カッティングス」を企画した。この展覧会は二部構成になっており、「挿し木・接ぎ木」を参照点として「環境」を主題とする「育まれる展覧会」と、彼が2016年に企画した展覧会「閉鎖された展覧会の回顧展」から、コロナ禍の状況を追加したドキュメンタリー映像《アンチ・ミュージアム・アンチ・ドキュメンタリー》が展示されていた。本発表は、美術館や展覧会制度を批判的に検証するこの映像作品に注目し、コプランが考えるキュレーションの独自性を明らかにする。

コプランは2009年に、ポンピドゥー・センターとベルンのクンストハレで開催された「空虚、回顧」展"Voids. A Retrospective"の共同キュレータを務めた。「空虚、回顧」展では、1958年のイヴ・クラインによる「空虚」展のほか、何も展示しない9つの展覧会が再現され、大部な図録が発行された。図録には、9つの空虚の展示とそのドキュメント資料の他、「58名の作家たちが、一人一頁ずつ自由に作品を提示する紙上展覧会」(椎原伸博 2024)も含まれ、図録自体が展覧会として機能する仕組みになっていた。

コプランが2020年にキングストン大学に提出した博士論文「マニフェスト・ペーパー・エキシビションズ 形式の革新的再物質化としてのキュレーション」*Manifest paper exhibitions : curating as a radical re-materialisation of forms.*では、展覧会と図録の相互互換性を主張する Manifest Paper Exhibitions という構想を宣言した。始まりとして2003年に les presses du réel から出版されたパーフェクト・マガジンについて言及している。コプランは多くの図録が、展覧会のキャプションを拡大しただけのものになっていることに疑問を持ち、出版物が展覧会と図録の双方の役割を持つとした。

パーフェクト・マガジンは、影響力のある作家や思想家45組を特集した書籍であり、創刊号かつ最終号として出版された。この書籍では、関係性の美学やYBAに関する作家のみならず、「agnès b.」社が、発行するフリーペーパー「ポワンディロニー」のマークも紹介されていた。ここで特に重要なのは白い紙に白いインクで印刷されていることである。

読者は、この書籍の内容を把握することが困難であり、一般的な書籍とは異なる、対抗的書籍として出版された。本発表では、コプランの初期キュレーションとも言えるパーフェクト・マガジンの内容を分析する。そこからコプランが、何も展示されない「空虚、回顧展」や「閉鎖された展覧会」への興味を深めて行ったことを明らかにする。